

〔特別レポート〕

ミュージックが求める音創りを目指して

88歳藤澤先生、ドイツに翔ぶ

～ドイツより再招聘された「音色の芸術」

レポート◎正木麻里子(当協会正会員)

藤澤克江先生(当協会監事)が、2003年に引き続き、マンハイム音楽学校のペーター・アイヒャー教授に招かれ、マンハイムにて10月7～9日にわたって指とピアノの音の講座を行った。題して「Die Kunst des Klangs(音色の芸術)」。2004年4月にピティナ・ピアノ指導セミナーにおいて行った講座を皮切りに、福岡、広島、岡山等でも開催している人気講座だ。



▲実際に手にとって指の形を伝授

見事に变化したドイツ学生の指と音楽

前回2003年には、音を奏でる手・指をどう創るか、という事に重点をおいて実施した部分もあったが、今回は楽曲に沿って、それぞれの音楽が求める音を実際の楽曲の中で出していく事により力点が置かれた。

音が出る瞬間のピアノの動きを判りやすくするために、ピアノのアクションを実際にホールの中に展示して(かなり苦勞して楽器メーカーから拝借し、輸送したとの事)なぜ藤澤先生が提唱する方法が有効であるか、それを視覚でも確認してもらおう試みも実施した。

まず7日の午後から開始したのは個人レッスン。その楽曲にふさわしい音をどうやって創り出すか、その部分がこのレッスンのポイントだ。登場してくれたのはこの音楽院でアイ

ヒャー先生に学んでいる生徒達と、藤澤先生と同じくこの時期マンハイムに招かれたナポリ音楽院のパオラ・ヴォルペ先生のお弟子さん(いずれも十代)が、ドビュッシー、ラフマニノフ、などの作品でレッスンを受けた。

最初の内こそ固い指やひじで、思うような音も充分出せない生徒たちだったが、藤澤先生が直接手や指にふれ、または逆に自分の腕やひじを触らせる、などして「柔軟な腕とそれを支える指」の感覚を伝授すると、若いだけにすぐピンと来るものがあつたらしい。ラフマニノフの前奏曲を演奏したネルソン君など、それまで自分の中にはあっても、どうやって外へ表現して良いか判らなかつた隠れた音楽性が、指を整える事によりほとばしる程に表現され、見学している一同を驚かせた。

日本人の音にドイツ人が感心。 教授陣もステージでデモ受ける

翌日からは午前・午後の部で2日間に渡って、バロック・クラシック・ロマン・近現代のそれぞれについて、藤澤先生の講義、小佐野先生・中島先生によるデモンストレーション、希望者に対するデモ・レッスン、という流れで進んだ。

ひと通りその時代の留意点、音作りのポイントなど、マン



▲観客席でも先生同士でディスカッション



▲脱力の方法を教える藤澤先生。この後、音が見違えるように変化した。



▲今回も先生の愛弟子である小佐野圭先生、中島裕紀先生、古賀美加緒先生、門馬恵先生が同行した。後列右端がペーター・アイヒャー先生。
▶先生方にもデモンストレーションに積極的にご参加頂いた。



ハイム音楽学校講師の上原和子先生の通訳を通して説明が行われた。実際の音を、という事で中島先生、小佐野先生がバッハなどの曲の一部でデモンストレーションを行ったが、この段階では音の出し方というより、何故日本人はそんなに良い音が出るのか、への興味が先になってしまったようで、本当に違いを実感して頂けたのは、その後希望者にピアノの前でデモンストレーションをしてもらってからではなかったろうか。会場にはマンハイム音楽学校キーボード専攻のヴェルナー・フレックマン先生、分校の校長先生でもあるトーマス・ヤンデル先生も来場されていて、この先生方も実際に生徒達の前で自らデモンストレーションを受けた。

実際にデモンストレーションをして頂くと、さすがに指導者の方々は音作りのポイントのみならず、それが自分達の指導にとって如何に重要であるか、をも即座に理解された模様である。

ドイツ人も苦勞する脱力を解決

受講生達は脱力が意外なほどに出来ていない場合が多く(体格がよいので、ある程度は弾けてしまうらしい)最初はむしろそちらに大車輪だった藤澤先生だったが、2日目からはその時代特有の音、についての言及が出来るようになっていった。講座の時間以外にもお弟子さん同士で「こんな事をやったんだよ」などと教え合っているらしく、時間を経る毎に理解が早く、深くなっていったようだ。

最終日には関係者全員で打ち上げパーティを行ったが、藤澤先生のお孫さんよりもっと若い生徒達が次々と先生を囲んで記念撮影に興じていた。この小柄で高齢の日本人女性が彼らにもたらした3日間の素敵なマジック、それを彼らは東洋の神秘、と受け取ったのだろうか。いずれ彼らが指導する年齢になった時、改めて聞いてみたい気がする。



【教授インタビュー】

ドイツでは珍しい、貴重な講座を拝見して

トーマス・ヤンデル先生
マンハイム音楽学校 プール分校校長

私はこのマンハイム音楽学校及び、郊外の音楽学校でピアノを教えています。教えている生徒はだいたい6~7才から十代後半まで、今一番年長の子が19歳です。前回(2003年)は全部の時間伺うことが出来なかったため、今回は是非全講座欠かさず聞かせて頂こうと思って参りました。

4つの時代の特徴を踏まえながら、その要求されるピアノのタッチや音色を楽器の発達史などの情報も含めて教えて頂ける、これはピアノを学習する者や指導者にとって非常に重要な情報です。4つの時代を同じテクニックで弾くことは出来ない、という事は理屈では判っている事でしょうし、またピアノのタッチに関する講座、はドイツ国内でもよく開催されております。しかしこの講座のようにその音楽が要求する音作りに特にこだわって、そこに特化している、というのが非常に特徴的だと思いました。

ここで伺った内容は私の今後の指導生活においても大いに役立つヒントがたくさん含まれております。またそんな素晴らしい講座をして下さった藤澤先生がはるか日本からお越しになった、しかも88歳というご高齢の方でいらっしゃる事に非常な驚きと尊敬の念を強く感じております。